あるむぜお

府中市郷土の森博物館だより
al museo
2022 年 3 月 20 日
No.139

復元工事が完了した頃の旧越智家住宅。防風林（カシグネ）として植えられている樹木がまだ小さく、屋根の茅も葺きたての状態。

もくじ

1-2　復元建物、郷土の森に建つ
その 4…旧越智家住宅
3　最近の発掘調査
府中第六小学校で発見！ 縄文土器のフチ子さん
4-5　NOTE
府中で見つかった動物形の硯
6　府中の史料に見る江戸時代の流行病
⑧麻疹とコロリがダブルで流行
7　園内植物探訪
③花見の花形
8　太陽系惑星ツアー
④火星のおすすめスポット紹介

復元建物、郷土の森に建つ

府中市郷土の森博物館には、現在 8 棟（とう）の建物が移築復元されています。小学校や役場・民家・商家等、江戸時代から昭和にかけてにつくられた特徴的なものばかりです。ここでは、各建物について移築復元された頃の写真でふりかえりつつ、それぞれの特色を 8 回シリーズで紹介します。

その 4…旧越智家住宅

旧越智家住宅は、郷土の森がオープンする直前の 1987 年（昭和 62）3 月、ハケ下の農家として移築復元されました。前号で紹介したハケ上の農家・旧河内（こうち）家住宅より、約 3 か月遅れての完成でした。

復元建物、郷土の森に建つ

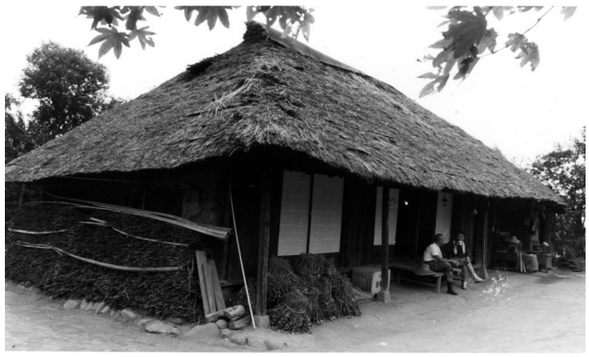
その 4…
旧越智家住宅

市の南部、水田稲作を中心としていた「ハケ下」と呼ばれる地域の農家を移築復元した茅葺民家が、今回紹介する旧越智家住宅です。もともと旧坂浜村（現 稲城市）から 1889 年（明治 22）に芝間（現 南町）に移築されており、創建は江戸時代後期にさかのぼると考えられています。

日本各地に茅葺民家が移築復元されている例は多いですが、もと豪農の家や有名人の生家などの立派な佇まいの建物が保存対象に選ばれる傾向にあります。しかし、この建物はそれとは真逆で、比較的一般的だったものと考えられています。小規模で、華美でもありません。晴着より普段着が古着として残りにくいように、家屋も一般的な建物は残りにくいように思います。その意味で、この建物が復元・保存されていることは稀有なことなのかもしれません。

旧越智家住宅は、1968 年（昭和 43）頃に行われた市内の草葺屋根建物調査を主導した民俗学者・宮本常一によって、当時市内に現存するなかでもっとも古い民家の形式を保つもので、後世に伝えていきたい存在として評価されていました。そして後にその価値が認められ、解体・保存が決まりました。1973 年 4 月 15 日発行の『広報ふちゅう』では、府中市が越智家住宅を譲り受けて解体し、「近い将来、野外郷土館ともいえる古民家群をつくり、私たちの先人が残した貴重な文化遺産を存続させていく」とその活用方針を表明しています。そして「古民家群」＝郷土の森が設立されるにあたり、解体から 14 年後の 1987 年 3 月、園内に復元されたのです。

敷地内の復元建物のうち、旧河内家住宅が養蚕の盛んだった明治～大正頃のハケ上の畑作農家を再現したのに対し、旧越智家住宅は創建時を想定した復元がなされました。また、現存していた最古の茅葺民家であるということよりも、水田稲作を営んでいたハケ下の農家を象徴する存在であることが重視されたようです。そのため郷土の森敷地内に段丘を人工的につくり、多摩川の旧堤防を利用しながら、高低差のあるハケ上とハケ下を再現し、旧越智家住宅はハケ下に復元されました。



解体前（1968 年頃）の旧越智家住宅。屋根は茅葺のままであり、周囲には焚木が積まれている。

府中近辺のハケ下の農家は、カシグネと呼ばれる防風のための生垣に囲まれていました。その外には畑、畑の先には用水路、用水路の先には水田、水田の先には肥料となる落ち葉を集めるための雑木林が広がる景観でした。

郷土の森では建物だけでなく、こうした周囲の景観も再現の対象としています。旧越智家住宅の南面には畑、水田が再現され、ハケ下になくてはならない景観を構成しています。畑と水田の間には流れる用水路を模した「流れ」があり、その先には流水を活用した水車小屋（1990 年完成）が建ち、それらを含め、かつてのハケ下の農村風景を再現できていると思っています。

さらに現在、旧越智家住宅はボランティアによる燻煙作業のほか、お話会の会場としても活用されています。町役場や小学校などのほかの復元建物から離れた場所にあり見逃しがちな存在ですが、建物のみならず景観も含めての再現であることを踏まえ、訪れてみてください。　　（佐藤智敬）

水田と畑ごしに見た園内の旧越智家住宅。カシグネに囲まれているため、建物の一部が隠れている。

最近の発掘調査

府中第六小学校で発見！縄文土器のフチ子さん

天神町4丁目　府中市ふるさと文化財課　佐藤　梨花

顔面把手付土器の破片（左：顔面、右：後頭部）

2021年の春に、府中第六小学校仮設校舎建設工事に伴い、遺跡の有無を調べる予備調査を行いました。第六小学校は、旧石器・縄文時代を中心とする天神町遺跡の中にあります。今回の調査でも、縄文時代を中心とした発見がありました。

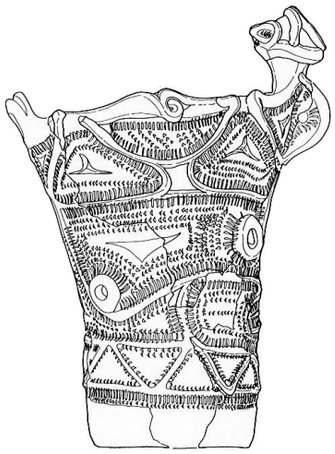
ここでは、顔面把手付土器の破片を紹介します。顔面把手付土器とは、縄文土器深鉢の口縁部に人物の頭部を表した突起が付く土器です。右下の図は長野県の比丘尼原遺跡で出土した例ですが、まるでカプセルトイの「コップのフチ子さん」がついているようです。

今回の出土品は、横幅4.4cmのハート形とみられる輪郭の顔が土器の内側を向いて付くもので、頭頂部は壊れていますが、髪の表現があったようです。また、土器の外側にあたる後頭部には、半分に割いた竹を粘土に押し付けた文様があります。この文様から、土器は縄文時代中期前半（約5,300年前）のものと考えられます。しかし、第六小学校周辺では、この時期の建物跡の発見はなく、この土器は集落に伴うものではなさそうです。

では、この土器はなぜここで発見されたのでしょうか。縄文時代中期ごろには、第六小学校の南約180 mの所に谷状地形がありました。現在でも野水と呼ばれる窪地状の地形が見られ、最近まで降雨の後に水の流れがあったと言います。縄文時代早期までは国分寺崖線から湧き出る豊富な流水があったようですが、それ以降には常時の流水はなくなり、縄文時代中期ごろには埋没しつつあったようです。

縄文時代中期ごろの第六小学校の辺りでは、安定的に水を得られないため集落の形成には向かなかったのでしょう。しかし、降雨の後などに得られる水を求めて動物が集まり、その動物を狩るために人々は野営をしていたのかもしれません。今回発見された顔面把手付土器も、こうした狩りのための野営の際に用いられたものかもしれないですね。

今回は限定的な調査なのでまだまだ分からないことが多いですが、2022年の春からは本格的な調査が行われます。どのような発見があるのか、とても楽しみです。



比丘尼原遺跡の顔面把手付土器

NOTE

府中で見つかった動物形の硯

石澤茉衣子

府中町１丁目で出土した動物形の硯。左前脚と海部分が残存。写真左は斜め前、右は斜め後ろから。右前脚は復元。

▼三重県の斎宮跡から出土した硯

今年２月に三重県の斎宮歴史博物館と共催した講座「武蔵国府と伊勢斎宮」に関連し、先日まで当館の本館エントランスホールの一角では三重県明和町の斎宮跡から出土した動物形の硯２点（レプリカ）を展示していました。ご覧になった方もいらっしゃるのではないでしょうか。どちらも見つかっているのは頭部のみで、１点は羊、もう１点は鳥の形をした硯と考えられています。これらの特徴的なフォルムは、なんとも惹き付けられるものがありました。

▼硯のモチーフになった動物

古代の人びとが使っていた主な文房具は、硯・筆・墨・紙でした。これらは「文房四宝」と呼ばれます。当時の硯は陶質、つまりやきものがほとんどでした。筆・墨・紙といった有機質のものに比べて硯は地中に残りやすく、古代の文書行政を探る手掛かりとして、古代史研究において大きな役割を果たしてきました。

古代の硯は、しばしば形態によって分類され、名称がつけられています。先述した羊や鳥の形をした硯は「形象硯」と呼ばれ、楕円形の硯に動物の頭・脚・尾などが付きます。管見の限りでは、小さな破片も含めて全国で 54 例見つかっています。羊・鳥のほか、亀が数例、さらに猪（または熊？）と考えられているものもあります。頭部や蓋など、一部のみが出土したと報告されている事例がほとんどです。蓋には、羊ならば羊毛、鳥ならば羽毛、亀ならば亀甲がヘラで描かれていることが多く、動物を特定する主な根拠になっています。

羊は日本にもともといる動物ではないといわれており、６世紀末に朝鮮半島の百済という国からラクダなどとともに贈られた記録が『日本書紀』にあります。他方、鳥が表現された造形は、さかのぼって弥生時代の木製品や古墳時代の動物埴輪にもみられます。中国では羊・鳥形の形象硯は見つかっておらず、亀形のみが確認されているそうです。

▼府中でも見つかっていた！

実は、府中でも1988年（昭和63）～1990年（平成２）におこなわれた武蔵国府関連遺跡の414次調査で形象硯が１点発見されています。出土地点は府中町１丁目で、京王線府中駅の北北東約100ｍに位置する11世紀前半ごろの遺構です。硯そのものの厳密な時期は特定できませんが、出土状況や形象硯の諸例を参考にすると、８世紀（奈良時代）～９世紀（平安時代前半）に製作・使用されたと考えられます。

この硯は左前脚と海（墨汁をためるところ）が残り、ほかの脚と陸は欠損しています。最大横幅約14cm、高さ約5.5cm、重さは約257ｇで、脚があることから現代と同じく机などに置いて使っていたのでしょう。外堤の前側にはわずかながら動物の頸と考えられる部分が確認できます。また、窯で焼かれるときに、前側がＵ字形にえぐれた蓋がかぶせられていたことが、付着した自然釉の状況から推測されます。内堤の上辺にあるＶ字形の切り込みは、筆置きとしての機能を有していたかもしれません。さらに、硯の裏面には指紋と思われる跡が残っています。

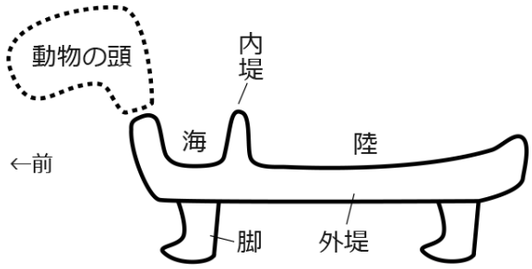
気になるのは「どの動物を象ったのか」ですが、残念ながら現時点ではわかりません。ただ、ほかの例を参照すると、それほど太くなく上方向にのびる頸を持つと思われるこの硯は、頸の太さや外堤への付き方が羊形とは異なるように見受けられます。このため、鳥形または亀形の可能性があると考えています。

▼形象硯の持ち主像

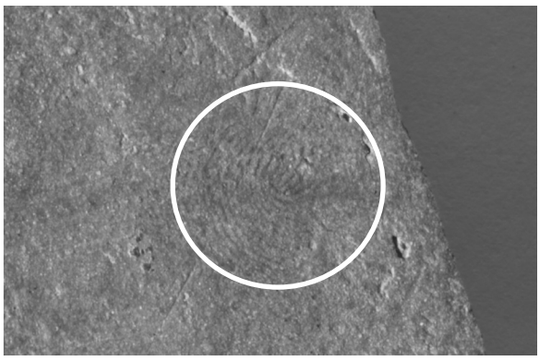
硯は、文字を使う人びとが集まった役所の跡などから見つかります。硯が地中から見つかることによって、そこがどのような遺跡かを考える手立てになっているとも言い換えられます。

なかでも形象硯は、奈良県の平城京・宮跡を筆頭に、冒頭に登場した三重県の斎宮跡、岡山県の備前国府跡や愛知県の三河国府跡など、限られた性格の遺跡でしか出土していません。硯自体、誰もが使えたわけではないうえに、動物の頭や脚がついた一見変わった硯を手元に置けたのは、ごく一部の人だったのでしょう。

府中に目を戻すと、形象硯の出土地点である府中町１丁目は、国衙（国府中枢の官庁街）から



府中で見つかった形象硯の推定断面図



硯の裏面に残っている指紋らしき跡

北へ少し離れた場所にあたります。ここでは比較的高級な種類から汎用的な種類まで、多数の硯が見つかっています。安易に結論付けることはできませんが、文字を扱う施設がこの辺りにあったと推測されます。そのなかで、とくに高級な動物形の硯を傍らに置ける人物がいたのでしょうか。形象硯は誰もが持てた品ではないこと、平城京・宮跡で多く見つかっていることをふまえると、奈良時代に都から武蔵国府に派遣された国司（国府のトップ役人）が持ってきて使用していたと考えたいところです。当時は服装などでその人の身分がぱっと一目でわかるようになっていましたが、硯のような備品もまた、その人の権威を視覚的に示す効果を持っていたことが想像されます。

今回ご紹介した形象硯のほかにも、府中では珍しい形をした古代の硯が見つかっています。国府が置かれた府中という街の特色をふまえれば、「どのような硯がどのような場所から見つかるか」は古代の文書行政のあり方を紐解くために欠かせない視点でしょう。

今後は硯を入口としながら、古代における文字と人びととの関係についても探っていきたいと思います。

府中の史料に見る

江戸時代の流行病

⑧麻疹とコロリがダブルで流行

132号からスタートした本シリーズも今回が最終回となりました。フィナーレを飾るのは、麻疹とコロリ（コレラ）がダブルで流行した文久2年（1862）の"魔の3か月”のお話です。

府中近辺では、この年の七夕頃から、享和3年（1803）以来となる麻疹の流行が始まります。約1か月後の8月2日には、発症した旅人をその場所で療養させるようにというお達しが、甲州街道の全ての宿場に出されていますので、広く流行している様子がわかります。感染力の強さを特徴とするこの流行病が、約60年ぶりに席捲しただけでも頭が痛いところですが、8月に入ると安政5年（1858）の悪夢…、コロリが再来します。両方が収束する閏8月下旬までの人々の混乱は、如何ばかりだったでしょう。

今回、当時の状況を知るために使用するのは、これまで度々登場した本宿村小野宮（住吉町）の医師・内藤治右衛門の父親が残した日記です。その内容から、経緯を追ってみることにします。

内藤家では7月末から麻疹ウィルスのリレーが始まり、8月下旬にかけて7名が次々と感染、幸いにも全員が快復しました。感染者が4人目を数えたあたりの8月18日、小野宮では流行病除けのために大般若経を転読して家々を回っており、日記の中にコロリの影が見え始めます。

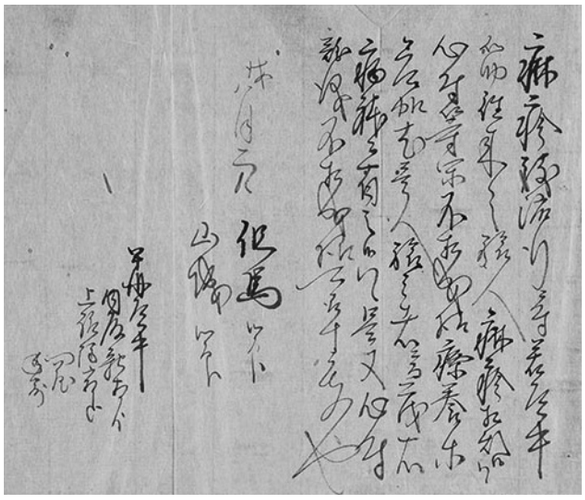
小野宮で最初のコロリ死亡者が出たのはその4日後の23日。その後、閏8月中旬にかけて2人死亡3人全快とあり、罹患者の半数が死亡した計算になります。真偽は不明ですが、日野宿では、8月28日までに麻疹とコロリで117人が死亡したと記載されていますので、居住者数の差はあれ、これは感謝すべき数値かもしれません。

この流行下における対処法として、代官所から「8月23日と閏8月5日は悪日（縁起の悪い日）なので外出せずに、昼9つ時から8つ時（午後0時～2時）までは食事だけでなく、湯や茶、煙草も一切口にしないように」という通達が出されました。日にちと時間指定の外出・飲食禁止に現実的な効果があったとは思えませんが、この悪日の災いを避けるため、家々の井戸に蓋をし、内藤家では朝から黒豆と米を煎じて飲んでいます。

勿論、コロリ除けのために神仏への祈願も行われ、安政5年と同様に六所宮（大國魂神社）の獅子頭と神宝の太刀が貸し出されました。8月29日に四ッ谷村（四谷）・中河原村（住吉町）・小野宮・下河原（南町）・芝間（同）、閏8月5日は現在の多摩市域にあたる連光寺村等10か村、その翌日には本宿村（本宿町）と屋敷分村（美好町）を巡行。閏8月5日の際は、川向うで大勢が提灯を掲げて一行を見送り、まるで5月の祭礼（くらやみ祭）のようだったといいます。

さらに、閏8月8日、本宿村では修験の安楽院を頼み、疫病送りが行われました。杉葉で輿を拵え幣束を立て、鉦・太鼓で囃し祭りながら進み、この輿を正光院塚へ納めています。

さて、このように当時の人々は神仏への祈願やまじないを行い、収束するまで人事を尽くして天命を待っていた訳ですが、「人事」の内容こそ異なれ、今も同様であることは私たちがよく知るところです。コロナウィルス感染症の流行から2年以上…、そろそろ良い天命が下ることを願ってやみません。（花木知子）



麻疹感染者の宿場での療養を命じる通達の写し
当館寄託「新宿菊池家文書」

園内植物探訪

③花見の花形

当館の梅が冬空を紅白の彩で賑わした後は、いよいよ春本番！ 花々はカラフルな装いで登場しますが、何と言っても主役は桜でしょう。当館に咲く桜は、梅ほど豊富ではありませんが、随所で華やかな花見が楽しめることでしょう。

古来から日本にあった桜の歴史は『古事記』（712 年）の記録から始まっているようです。ここには木花開耶姫と呼ばれる女神が富士山上空から花の種を蒔いたと記述されています。姫が美しくも神としては短命であったことから、満開の後パッと散ってしまう桜を想起させると言われます。加えて「サクヤ」が「サクラ」の由来とされる一説もあります。このように神聖なる樹木の桜ですが、奈良時代には今ほど人気はなく、中国から渡来した梅が花見の主役でした。貴族を中心に梅を愛でながら歌を詠む会が催され、『万葉集』にも 110 首の歌を残しています。因みに桜の歌は梅の半分以下で、大きく差が開いていました。

旧府中尋常高等小学校を背景にサクラの花見

ところが、平安時代になると形勢が逆転します。奈良時代には積極的に中国の文化を取り入れていた背景が梅を押し出したものの、この時代は菅原道真が遣唐使を廃止したことで日本独自の文化が発展したためと考えられています。つまりは中国産の花から国産の花へと主役が交代したわけです。平安時代に作られた『古今和歌集』では、桜の歌は 70 首に増え、梅は 18 首に減りました。桜の花見は、天皇や貴族の間に広まりながら、鎌倉時代以降、武士にも浸透し、江戸時代にはいよいよ庶民の間にも流行していきました。そして、今や桜は日本の春を象徴する花です。

さて人気の桜ですが、そもそもは北半球の暖地に広く分布し、日本にも多くの種類が自生していました。但し、突然変異を起こし易かったため、各土地の環境に適応する形で多くの品種が誕生してきました。現在の桜は、この性質を活用し、オオシマザクラ、ヤマザクラ、エドヒガンザクラを元に改良されたもので 600 種以上を数えると言います。内、当館をはじめ、府中市内はもちろん全国的に多く見られるのはソメイヨシノです。この品種は江戸時代末期、エドヒガンザクラとオオシマザクラが交配した桜を染井村（現 豊島区）の植木屋が見つけ、ヤマザクラの名所、奈良・吉野山にあやかり「吉野桜」として売り出したのが初めとされています。その後、同名所の桜と混同を避けるため、1900 年に「染井吉野」と改名したのです。接ぎ木で増え、成長も速いことから、ソメイヨシノは様々な場所に拡大していきました。現代における花見の桜は 7 割がこの桜です。

但し、当館の桜はソメイヨシノに限らず、他にウスズミザクラと呼ばれる大木があります。岐阜県旧根尾谷（現在は本巣市）にある天然記念物のエドヒガンザクラの古木から分けられた子孫です。満開の白い花が散り際に淡い墨色に変化する様子から「淡墨桜」の名が付いています。ソメイヨシノよりも若干早い時期に開花し、花見のオープニングを飾る形で先陣を切ります。これに、春だけでなく秋から冬にも咲く品種「十月桜」や、江戸時代から花見の名所だった「小金井桜」が脇を固め、見応えのある布陣が揃います。

全国展開のソメイヨシノですが、成長してから約 60 年と、意外に短い寿命です。多くは戦前に植えられたので、大半が衰えて植替えが必須の状態です。加えて近年の気候変動で、開花時期が年によって早かったり遅かったりで、満開の予測が困難を極め予定調和とならない実状です。いつの世も変わらずに桜の花見を楽しむには、樹木管理はもちろん、地球環境そのものを改善する他ありません。今の内に早く手を打たないと、サクラが錯乱してしまいますから。　　（中村武史）

太陽系惑星ツアー

④火星のおすすめスポット紹介

2021 年 12 月、前澤友作さんと平野陽三さんが、日本の民間人として初めて国際宇宙ステーションに滞在しました。この年は世界で 20 人を超える民間人が宇宙へ行ったため、「宇宙旅行時代の幕開け」とも言われるようです。私たちが気軽に宇宙へ行ける日もそう遠くないかもしれません。そこで今回は、将来の宇宙旅行で行くかもしれない、お隣の惑星「火星」の「おすすめスポット」について紹介します。

火星は岩石でできた惑星で、直径は地球の半分ほどです。地球の地軸のように、約 25 度傾いた自転軸を持ち、四季の変化もあります。1 日の長さは、24 時間 37 分で地球とほぼ同じ。表面の岩石や砂が酸化鉄を大量に含んでいるため、赤っぽい色をしているのが特徴です。この惑星に行く機会があったら、ぜひ次のおすすめスポットを押さえてください。

①オリンポス山

オリンポス山は、太陽系最大の山で、高さ 2 万 7,000 m、裾野の広がりが約 600 ㎞で、富士山と比べると約 7 倍もの高さです。歩いて登るのは難しいと思いますので、遠くから眺めてみましょう。

②マリネリス峡谷

マリネリス峡谷は、右下の画像のように、火星の赤道に沿って伸びる巨大な谷です。東西の長さは約 4,000km で、火星の表面を 4 分の 1 周するほど。幅は約 100 ㎞、深さは約 8 ㎞もあり、太陽系最大規模の峡谷です。過去に火星内部が膨張してできた谷だと考えられています。のぞきこむ時は、落ちないようにご注意ください。

③極冠

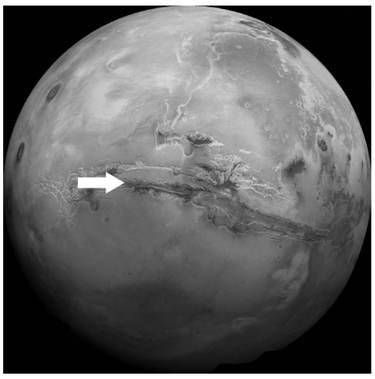
火星の北極と南極には、水の氷や二酸化炭素の氷でできた「極冠」と呼ばれる地形があります。極冠は、火星が夏の時期は、二酸化炭素が気体になるため小さくなり、冬の時期は、二酸化炭素が固体となって氷の層を作るため大きくなります。季節によって変わる極冠の大きさを楽しむのもいいかもしれませんね。

④青い夕焼け

地球の空は、昼間は青く、夕方は赤く見えますが、火星の空の色は地球とは反対で、昼間は赤く、夕方は青く見えます。なぜなら、火星は地球と比べて大気が薄く、塵が多いため、昼間は赤い光が散乱し、空が赤く見えます。夕方になると、太陽の光が火星の大気中を長く通ることで、赤い色は散乱され、青い光が多く目に届くため、青い夕焼けに見えるのです。地球とは違う空の色にもご注目ください。

火星のおすすめスポットについて見てきましたが、火星までは片道数か月かかる長旅です。そのため、安全性や費用面など、まだまだ多くの問題があります。中国やアメリカは 2030 年代に火星有人探査を目指しており、その実現に期待が高まっています。さまざまな問題がクリアになり、安心・安全な宇宙旅行で火星に行ける日が来るのを楽しみに待ちましょう。

（上野アイ子）



矢印の帯状に見えるところがマリネリス峡谷
提供：NASA

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

〒 183 – 0026 東京都府中市南町 6 – 32
TEL 042 – 368 – 7921
府中市郷土の森博物館
http : //www.fuchu-cpf.or.jp/museum/